

## 1-8 ドイツ文学

### 研究・教育活動の概要と特色

ドイツ文学専攻分野（以下、本研究室）は、1924年（大正13年）の設立以来、堅実な文献学的手法によるドイツ文学研究を研究・教育の基本として発展してきた。研究対象としては伝統的にゲーテやロマン派が中心であったが、初代教授小宮豊隆以来の比較文学的研究や、戦時中在職したカール・レーヴィットの影響を受け継ぐ思想系の研究などにも特色がある。現在のスタッフのうち、哲学出身の森本は、言語や芸術をめぐる理論的な研究を専門とする。05年度着任の嶋崎は、先端的な言語学的手法を取り込んだドイツ語学の研究者であると同時に、中世以来のドイツ語史にも詳しい。また外国人教員（教授）のシュミッツは、トーマス・マンやゲーテの研究者として、ドイツ文学の研究・教育を支えている。なお2008年在職中に病没した前教授原研二とシュミッツは、ブルクハルト財団により編集が進められているブルクハルト全集の『イタリア・ルネサンスの文化』の巻の歴史校訂版編集に携わった。

教育面においては、まずドイツ語力、特に文学的なテキストを正確に読む力の養成を主眼としている。伝統的な目標であるが、人文学研究のスキルとエトスを学ぶためには不可欠の要素であり、学生の多くもこの方針に満足している。同時に近年は、外国人教員を中心としたコミュニケーション能力の訓練に力を入れるとともに、学生の様々なニーズに応えるべく、スタッフの専門領域の幅広さを活かした授業内容の多様化に努めている。

本研究室のスタッフは、全学教育（一般教育）科目「ドイツ語」を担当するとともに、研究上ドイツ語を必要とする学部生のために共通科目「専門ドイツ語」の授業を提供するなど、専門分野教育以外でのドイツ語教育にも尽力している。また「ドイツ語科」教職課程認定への対応として、中学・高校の教員免許状取得に必要な授業科目を開講し、研究科および大学の入試関連諸業務等においても、ドイツ語の専門家としての立場から貢献している。

### I 組織

#### 1 教員数（2013年9月末現在）

教授：3

准教授：0

講師：0

助教：0

教授：森本浩一，嶋崎啓，ブリギッテ・シュミッツ

准教授：

## 2 在学生数（2013年9月末現在）

学部 (2年次以上)	学部 研究生	大学院博士 前期	大学院博士 後期	大学院 研究生
27	0	4	2	0

## 3 修了生・卒業生数（2009～2013年度）

年度	学部卒業生	大学院博士課程 前期修了者	大学院博士課程 後期修了者 (含満期退学者)
09	8	3	3
10	9	3	1
11	6	2	0
12	3	1	0
13	0	0	0
計	26	9	4

\* 2013年度は、9月末までの数字

## II 過去5年間の組織としての研究・教育活動（2009～2013年度）

### 1 博士学位授与

#### 1-1 課程博士・論文博士授与件数

年度	課程博士授与件数	論文博士授与件数	計
09	2	0	2
10	1	0	1
11	0	0	0
12	0	1	1
13	0	0	0
計	3	1	5

\* 2013年度は、9月末までの数字

#### 1-2 博士論文提出者氏名、年度、題目、審査委員

渡辺美奈子，2009 年度，『ヴィルヘルム・ミュラーの詩作と生涯——『冬の旅』を中心に——』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・阿部宏，准教授・嶋崎啓，教授・シュミッツ ブリギッテ

川村和宏，2009 年度，『エンデの貨幣観と錬金術思想の系譜——未公刊資料と後期作品に基づく考察——』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・大河内昌，准教授・嶋崎啓，教授・シュミッツ ブリギッテ

橋本由紀子，2010 年度，『ゲーテとバロック文学——『ファウスト』における「夾雑」的場面の分析——』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・大河内昌，准教授・嶋崎啓，教授・シュミッツ ブリギッテ

斎藤成夫，2012 年度，『ドイツ近代小説にみる神話志向の系譜』

審査委員：教授・森本浩一（主査），教授・大河内昌，准教授・嶋崎啓

## 2 大学院生等による論文発表

### 2- 1 論文数

年度	審査制学術誌 (学会誌等)	非審査制誌 (紀要等)	論文集 (単行本)	その他	計
09	1	0	0	0	1
10	0	0	0	1	1
11	1	0	0	0	1
12	1	0	0	0	1
13	0	0	0	0	0
計	3	0	0	1	4

\* 2013 年度は 9 月末までの数字。ただし、以後の掲載が決定しているものも含む。

### 2- 2 口頭発表数

年度	国際学会	国内学会	研究会	その他	計
09	0	2	9	0	11
10	0	0	7	0	7
11	0	1	4	0	5
12	0	3	7	0	10
13	0	0	3	0	3
計	0	6	30	0	36

\* 2013年度は9月末までの数字。ただし、以後の発表が決定しているものも含む。

## 2-3 上記の大学院生等による論文・口頭発表の中の主要業績

### (1) 論文

橋本由紀子「異界からの訓言——エンブレムの構造から読むゲーテ『ファウスト第一部』」, 『東北ドイツ文学研究』52号, 2009年.

宮本祥子「ミヒャエル・エンデ『はてしない物語』——作者／読者, 大人／子ども」, 『批評と創作2010(文化研究報告第2輯)』, 2011年.

宮本祥子「児童文学の領域——拡大・縮小・融解? ——」, 『ナラティブ・メディア研究』3号, 2011年.

嶋崎順子「ジャン・パウルの言語省察——『美学入門』第9プログラム「機知について」を中心に」, 『東北ドイツ文学研究』54号, 2012年.

### (2) 口頭発表

竹内拓史「天才への憧憬と失望——ビューヒナーとレンツのドラマツルギーについて」, 第26回ドイツ語圏文化研究会, 口頭発表, 2009年6月19日.

川村和宏「ミヒャエル・エンデのゲーテ『メルヒェン』受容——シュタイナーによる解釈との関連を中心に」, 日本独文学会秋期研究発表会, 2009年10月18日.

川村和宏「『メルヒェン』に敷衍されたファウストの黒い厨」, 東北ドイツ文学会第52回研究発表会, 2009年10月31日.

野内清香「『ニーベルンゲンの歌』における英雄たちの対称性」, 第57回ドイツ語圏文化研究会, 2012年5月30日.

野内清香「ギーゼルヘルの家臣」ダンクワルト——『ニーベルンゲンの歌』の詩人が創作した人物の意義」, 日本独文学会2012年秋季研究発表会2012年10月14日.

渡辺美奈子「人生の愛と歌——ヴィルヘルム・ミュラーの『冬の旅』」, 第25回ドイツ語圏文化研究会, 2009年6月5日.

嶋崎順子「瞬間へのまなざし——ジャン・パウルの機知論と視覚的表現について——」, 第38回ドイツ語圏文化研究会, 2010年6月11日.

嶋崎順子「ジャン・パウルの機知論——『美術入門』第9プログラムについて」, 第49回ドイツ語圏文化研究会, 2011年6月24日.

嶋崎順子「ジャン・パウルの言語をめぐる省察——『美学入門』第9プログラム「機

- 知について」を中心に——」，東北ドイツ文学会第 54 回研究発表会，2011 年 10 月 29 日。
- 嶋崎順子「『陽気なヴッツ先生』における語り手ジャン・パウルの誕生」，日本独文学会 2012 年春季研究発表会，2012 年 5 月 19 日。
- 嶋崎順子「不在の父を求めて——ジャン・パウル『巨人』について——」，第 58 回ドイツ語圏文化研究会，2012 年 6 月 6 日。
- 嶋崎順子「「ローマの中国人」——ゲーテのジャン・パウル評価をめぐる」，東北ドイツ文学会第 55 回研究発表会，2012 年 10 月 27 日。
- 嶋崎順子「ロマン主義とナショナリズム——ボイムラーのロマン主義観——」，「かいろす」の会研究発表会，2013 年 3 月 29 日。
- 橋本由紀子「ドイツ・バロック文学について」，第 24 回ドイツ語圏文化研究会，2009 年 5 月 27 日。
- 橋本由紀子「バロック後，ゲーテまでの文学観——ゴットシェート，レッシング，スイス派，ゲーテにおけるバロック克服の動きをたどる」，第 39 回ドイツ語圏文化研究会，2010 年 6 月 23 日。
- 加美山若奈「ドイツロックの展開——クラウトロックから NDH まで」，第 30 回ドイツ語圏文化研究会，2009 年 10 月 2 日。
- 渡邊紀子「人形的人間，人間的人形：E.T.A.ホフマン『砂男』と人形の文化史」，第 31 回ドイツ語圏文化研究会，2009 年 10 月 9 日。
- 小田嶋大「ヴォータンの「意志」の行方——R.ヴァーグナー『ニーベルングの指環』におけるヴォータンとブリュンヒルデの関係を中心に」，第 30 回ドイツ語圏文化研究会，2009 年 10 月 2 日。
- 風岡祐貴「バッハマンの詩について」，第 29 回ドイツ語圏文化研究会，2009 年 7 月 31 日。
- 田中壽廣「漂泊の詩人ヘルダーリンと松尾芭蕉の比較考察」，第 35 回ドイツ語圏文化研究会，2010 年 1 月 15 日。
- 田中壽廣「ヘルダーリンの自然観と故郷観についての考察」，第 43 回ドイツ語圏文化研究会，2010 年 10 月 15 日。
- 畠理恵子「ドイツにおけるファッションの考察」，第 35 回ドイツ語圏文化研究会，2010 年 1 月 15 日。
- 畠理恵子「現代ドイツにおけるモード意識」，第 43 回ドイツ語圏文化研究会，2010 年 10 月 15 日。
- 阿部愛子「リヒテンベルクと接続法」，第 40 回ドイツ語圏文化研究会，2010 年 7

月 9 日.  
阿部愛子「リヒテンベルクの実験物理学とアフォーリズム」, 第 53 回ドイツ語圏文化研究会, 2011 年 10 月 21 日.  
宮本祥子「児童文学とファンタジーの現在——ラルフ・イーザウ『盗まれた記憶の博物館』から——」, 第 40 回ドイツ語圏文化研究会, 2010 年 7 月 9 日.  
宮本祥子「児童文学の領域——拡大・縮小・融解?」, 第 13 回ナラティヴ・メディア研究会, 2011 年 1 月 26 日.  
宮本祥子「現代ファンタジーの世界」, 第 53 回ドイツ語圏文化研究会, 2011 年 10 月 21 日.  
山口貴文「戦時における集団についての考察」, 第 50 回ドイツ語圏文化研究会, 2011 年 7 月 1 日.  
山口貴文「戦争をめぐる思想と現実」, 第 64 回ドイツ語圏文化研究会, 2012 年 6 月 6 日.  
黒澤恵「ドイツ語における動物に関する慣用表現」, 第 60 回ドイツ語圏文化研究会, 2012 年 7 月 4 日.  
佐藤光「E.T.A.ホフマンの創作メールヒェンにおける対立する二つの原理」, 第 60 回ドイツ語圏文化研究会, 2012 年 7 月 4 日.  
佐藤光「ドイツにおける環境政策と環境教育」, 第 68 回ドイツ語圏文化研究会, 2013 年 6 月 14 日.  
清水翔太「自意識過剰な文学——ポスト・モダン文学の必要条件——」, 第 59 回ドイツ語圏文化研究会, 2012 年 6 月 27 日.  
清水翔太「「尽きの文学」としての『世界の測量』 「補給の文学」としての『世界の測量』」, 第 69 回ドイツ語圏文化研究会, 2013 年 6 月 21 日.  
東陽介「ベンヤミン研究に至る経緯」, 第 70 回ドイツ語圏文化研究会, 2013 年 6 月 28 日.

### **3 大学院生・学部生等の受賞状況**

なし

### **4 日本学術振興会研究員採択状況**

なし

### **5 留学・留学生受け入れ**

#### **5- 1 大学院生・学部学生等の留学数**

2009年度 大学院 計1名 ボン大学（ドイツ連邦共和国）

2012年度 学部学生 計1名 ゲッティンゲン大学（ドイツ連邦共和国）

2013年度 学部学生 計1名 ストックホルム大学（スウェーデン）

## 5-2 留学生の受け入れ状況（学部・大学院）

年度	学部	大学院	計
09	2	0	2
10	1	1	2
11	0	0	0
12	1	0	1
13	1	0	1
計	4	1	5

## 6 社会人大学院生の受け入れ数

年度	前期課程	後期課程	計
09	2	0	2
10	0	0	0
11	0	0	0
12	0	0	0
13	0	0	0
計	2	0	2

## 7 専攻分野出身の研究者・高度職業人

### 7-1 専攻分野出身の研究者

竹内拓史・麗澤大学・2011年度

川村和宏・岩手大学・2012年度

### 7-2 専攻分野出身の高度職業人

高校等教員2名，ジャーナリスト1名

## 8 客員研究員の受け入れ状況

なし

## 9 外国人研究者の受け入れ状況

なし

## 10 刊行物

『東北ドイツ文学研究』（専門分野の研究誌），1957年より毎年刊行.

『ナラティヴ・メディア研究』（情報科学研究科との共同刊行による研究誌），  
2009年より毎年刊行.

『文化研究報告』（専門分野の論文集），2009年より不定期刊行.

## 11 学会・研究会・講演会・シンポジウム等の開催・事務局等引き受け状況

### 2009年度

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第6回研究会，2009年7月21日，開催.

学会：東北ドイツ文学会・第52回研究発表会，2009年10月31日，事務局.

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第7回研究会，2009年10月21日，開催.

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第8回研究会，2009年11月25日，開催.

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第9回研究会，2010年3月8日，開催.

講演会：ナラティヴ・メディア研究会講演会（佐々木果氏），2010年3月9日，開催.

### 2010年度

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第10回研究会，2010年7月30日，開催.

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第11回研究会，2010年10月14日，開催.

講演会：ナラティヴ・メディア研究会講演会（ティエリ・グルンステン氏），  
2010年10月15日，開催.

学会：東北ドイツ文学会・第53回研究発表会，2010年11月6日，事務局.

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第12回研究会，2010年11月16日，開催.

研究会：ナラティヴ・メディア研究会第13回研究会，2011年1月26日，開催.

### 2011年度

学会：東北ドイツ文学会・第54回研究発表会，2011年10月29日，事務局.



2012 年度

研究会：ナラティブ・メディア研究会第 14 回研究会，2012 年 10 月 17 日，  
開催。

学会：東北ドイツ文学会・第 55 回研究発表会，2012 年 10 月 27 日，事務局。

講演会：ナラティブ・メディア研究会講演会（ブノワ・ペーターズシ），2012  
年 11 月 13 日，開催。

研究会：ナラティブ・メディア研究会第 15 回研究会，2013 年 1 月 25 日，開  
催。

## 1 2 専攻分野主催の研究会等活動状況

2009 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 24 回，2009 年 5 月 27 日。

同 第 25 回，2009 年 6 月 5 日。

同 第 26 回，2009 年 6 月 19 日。

同 第 27 回，2009 年 7 月 3 日。

同 第 28 回，2009 年 7 月 10 日。

同 第 29 回，2009 年 7 月 31 日。

同 第 30 回，2009 年 10 月 2 日。

同 第 31 回，2009 年 10 月 9 日。

同 第 32 回，2009 年 10 月 30 日。

同 第 33 回，2009 年 11 月 6 日。

同 第 34 回，2009 年 11 月 13 日。

同 第 35 回，2010 年 1 月 15 日。

同，第 36 回，2010 年 2 月 19 日。

2010 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 37 回，2010 年 5 月 21 日。

同，第 38 回，2010 年 6 月 11 日。

同，第 39 回，2010 年 6 月 23 日。

同，第 40 回，2010 年 7 月 10 日。

同，第 41 回，2010 年 7 月 16 日。

同，第 42 回，2010 年 7 月 23 日。

同，第 43 回，2010 年 10 月 15 日。

同，第 44 回，2010 年 11 月 5 日。

同, 第 45 回, 2010 年 11 月 12 日.  
同, 第 46 回, 2010 年 11 月 19 日.  
同, 第 47 回, 2011 年 2 月 18 日.

#### 2011 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 48 回, 2011 年 6 月 17 日.  
同, 第 49 回, 2011 年 6 月 24 日.  
同, 第 50 回, 2011 年 7 月 1 日.  
同, 第 51 回, 2011 年 7 月 15 日.  
同, 第 52 回, 2011 年 7 月 22 日.  
同, 第 53 回, 2011 年 10 月 21 日.  
同, 第 54 回, 2011 年 11 月 11 日.  
同, 第 55 回, 2011 年 11 月 18 日.  
同, 第 56 回, 2012 年 2 月 17 日.

#### 2012 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 57 回, 2012 年 5 月 30 日.  
同, 第 58 回, 2012 年 6 月 6 日.  
同, 第 59 回, 2012 年 6 月 27 日.  
同, 第 60 回, 2012 年 7 月 4 日.  
同, 第 61 回, 2012 年 7 月 11 日.  
同, 第 62 回, 2012 年 7 月 18 日.  
同, 第 63 回, 2012 年 7 月 25 日.  
同, 第 64 回, 2012 年 10 月 24 日.  
同, 第 65 回, 2012 年 11 月 7 日.  
同, 第 66 回, 2012 年 11 月 14 日.  
同, 第 67 回, 2013 年 2 月 13 日.

#### 2013 年度

ドイツ語圏文化研究会・第 68 回, 2013 年 6 月 14 日.  
同, 第 69 回, 2013 年 6 月 21 日.  
同, 第 70 回, 2013 年 6 月 28 日.  
同, 第 71 回, 2013 年 7 月 12 日.  
同, 第 72 回, 2013 年 7 月 19 日.  
同, 第 73 回, 2013 年 7 月 26 日.

### 1.3 組織としての研究・教育活動に関する過去5年間の自己点検と評価

「研究・教育活動の概要と特色」で述べたように、ドイツ文学専攻分野（以下、本研究室）は、伝統的な文学研究を核としながら、現代の状況に対応すべく、文化・思想・言語といった方面での研究・教育活動を推し進めることを目標としてきた。

この目標は、研究面においてはほぼ達成されているものと考えられる。組織とはいえ、人文学の研究は研究者個々の活動によるものである。所属スタッフはそれぞれに特徴のある研究業績をあげており、科学研究費補助金の受給件数も多い。また、定例的な研究会を主催すると同時に、当研究室は、東北ドイツ文学会（日本独文学会東北支部）の恒久的な事務局として、毎年研究発表会の企画・運営と研究誌の刊行を続けている。それ以外にも、東北大学情報科学研究科と連携した「ナラティブ・メディア研究会」など、領域横断的な学術活動においても、本研究室の教員は企画・運営の中心として活躍している。このように専攻分野の壁を超えた積極的な研究交流に力を入れてきたことは、評価に値する成果であると思われる。

後述の理由もあって、ドイツ文学分野では学生数の少なさが構造的な問題として挙げられてきた。しかしこの5年間、博士前期課程はおおむね定員を充足しており、また博士後期課程において、2009年度に2名、2010年度に1名の課程博士号取得者を出していることは、過去に例を見ない特筆すべき実績である。

かつて本研究室からは多くの研究者が育っていったが、この5年間に大学の専任教員となったのは助教経験者2名である。いわゆる大綱化以降、ドイツ語・ドイツ文学分野の研究職ポストが激減したことも影響し、研究志向で大学院に入学する学生はほとんど存在しなくなった。修士課程修了後、公務職・民間企業に就職することが常態化しており、今後もこの傾向は続くと思われる。そのため、研究室としても、学部卒業者および修士課程修了者への就職活動の支援に力を入れ、人文学を学んだ学生を積極的に社会に送り出す態勢を整えている。数字には表れてこないが、こうした現実的対応は、目下の状況においては評価されてしかるべきものである。

学生数が少ないことは、教育指導上はメリットともなる。これも数字には表れないが、授業外の読書会・研究会や面談等を通じて、きめ細かい個別指導を行っている。ドイツ語・ドイツ文学分野で研究者になることが難しく、大学院進学へのインセンティブが急激に低下している中で、この分野に関心を抱く数少ない若者をどのように育成するべきか、模索を続けている状況である。

なお学部においては、特に1年次学生に対して分野の魅力を積極的に紹介する努力を続けた結果、近年は学生数が増加し、学部学生（研究生を含む）総数も2009・2010年度には30名と定員の上限に至った。授業でも、文学研究という核を重視しつつ、多様

なニーズに応える工夫を重ねており、そうしたことが、学生の間で一定の評価を受けているものと推察される。

厳しい状況の中で、分野の存続・発展の方向性を模索しながら本研究室が行ってきたこの5年間の研究・教育両面における努力とその成果は、おおむね評価に値すると考える。

### Ⅲ 教員の研究活動（2009～2013年度）

#### 1 教員による論文発表等

##### 1-1 論文

森本浩一「物語認知の比較ジャンル論的考察——物語的他者への自己移入という観点から」、『ナラティブ・メディア研究会活動報告書 2008年度』、ナラティブ・メディア研究会、121-145頁、2009年3月。

森本浩一「イメージと物語——T・グルンステンの著作を手がかりに」、『ナラティブ・メディア研究』第2号、ナラティブ・メディア研究会、127-140頁、2010年8月。

森本浩一「メタ表象としての虚構」、『文学における不在——原研二先生記念論文集』、東北大学ドイツ文学研究室刊、2011年11月。

森本浩一「物語の〈人物〉はどのように経験されるか——比較ジャンル論的考察」、『ナラティブ・メディア研究』第4号、ナラティブ・メディア研究会、55-85頁、2013年3月。

Schmitz, Brigitte, “Thomas Manns Sicht auf Hitler in Verbindung mit Manns Verhältnis zum Judentum (Teil III).” 『東北大学文学研究科研究年報』58号、東北大学文学研究科、2009年3月。

Schmitz, Brigitte, “Gedanken zum Lebensinteresse angesichts des Todes in Werken Thomas Manns und im weiteren geistesgeschichtlichen Kontext mit Blick auf die Thematik der Ars moriendi (Teil I).” 『東北大学文学研究科研究年報』60号、東北大学文学研究科、2011年3月。

Schmitz, Brigitte, “Der Tod als ein Phänomen des Anwesend-Abwesenden – Betrachtungen zur Todesthematik im Werk von Thomas Mann-.” 『文学における不在——原研二先生記念論文集』、東北大学ドイツ文学研究室刊、2011年11月。

Schmitz, Brigitte, Betrachtungen zu Thomas Manns Exilerfahrungen und zu seinem Schreiben im Exil (Teil I). 『東北大学文学研究科研究年報』62号、東北大学文

学研究科，2013年3月。

嶋崎啓「西・北・東ゲルマン語の諸相」，『日本独文学会研究叢書 081 ゲルマン祖語から現代ドイツ語へ——歴史的発展における駆流とその反動——』，齋藤治之編，日本独文学会，2011年10月。

嶋崎啓「脱神話化の物語としての『ニーベルンゲンの歌』」，『文学における不在——原研二先生記念論文集』，東北大学ドイツ文学研究室刊，2011年11月。

## 1-2 著書・編著

川村和宏『ミヒャエル・エンデの貨幣観——ゲーテの『メルヒェン』からシュタイナーを経た錬金術思想の系譜——』，三恵社，2011年。

森本浩一・嶋崎啓・田村久男・里村和秋・斎藤成夫編『文学における不在 原研二先生追悼論文集』，原研二先生追悼論文集刊行会，2011年。

嶋崎啓『ドイツ語不定詞・分詞』，大学書林，2012年。

## 1-3 翻訳、書評、解説、辞典項目等

Schmitz, Brigitte, “Beitrag über Leben und Werk des Germanisten Kenji Hara, Universität Tohoku – aus Anlass seines Todes im Jahre 2008 –.” In: *Sammelband der Internationalen Charles-Sealsfield-Gesellschaft*, Wien, 2010.

嶋崎啓「石川栄作訳『ニーベルンゲンの歌』（前・後編）」（書評），『九州ドイツ文学』26号，九州大学独文学会，71-74頁，2012年10月。

嶋崎啓『神の文化史事典』（事典項目）白水社，北欧神話の部，2013年2月。

## 1-4 口頭発表

Schmitz, Brigitte, “Ästhetik der Dinge” Arbeitsgruppe 3A (Arbeitstext: W. G. Sebald: *Austerlitz*), 日本独文学会・第52回ドイツ文化ゼミナール，部会主宰者講演，2010年3月。

Schmitz, Brigitte, “Zu einigen Themenaspekten im Werk des Philosophen Harry Frankfurt” Arbeitsgruppe 4C, 日本独文学会・第54回ドイツ文化ゼミナール，部会主宰者講演，2012年3月。

嶋崎啓「ゲルマン祖語から西・北・東ゲルマン語への変化」，日本独文学会 2010年秋季研究発表会シンポジウム「ゲルマン祖語から現代ドイツ語へ——歴史的発展における駆流とその反動——」，パネル，2010年10月10日。

嶋崎啓「現代ドイツ語における現在完了形の発展度合」，日本独文学会西日本支部  
第 64 回研究発表会シンポジウム「現代ドイツ語の特徴と傾向」，パネル，2012  
年 12 月．

嶋崎啓「A. ボイムラーの J. グリム像」，かいろす研究会，2013 年 3 月．

川村和宏「『メルヒェン』の射程——モチーフ・プロット・再話の潜在性」，第  
37 回ドイツ語圏文化研究会，口頭発表，2010 年 5 月 21 日．

川村和宏「携帯電話用 Flash プログラムによる初学者向けドイツ語学習ソフトウェ  
ア開発」，東北ドイツ文学会第 53 回研究発表会，口頭発表，2010 年 11 月 6  
日．

川村和宏「『はてしない物語』とゲーテの錬金術モチーフについて」，第 48 回ド  
イツ語圏文化研究会，2011 年 6 月 17 日．

川村和宏「携帯電話用ドイツ語学習ソフトウェア開発と授業における実践」，日  
本独文学会 2011 年度秋季研究発表会，口頭発表，2011 年 10 月 15 日．

川村和宏「『はてしない物語』に描かれた『メルヒェン』の錬金術モチーフ」，  
東北ドイツ文学会第 54 回研究発表会，口頭発表，2011 年 10 月 29 日．

## 2 教員の受賞歴 (2009~2013 年度)

なし

## IV 教員による競争的資金獲得 (2009~2013 年度)

### (1) 科学研究費補助金

2009 年度

Schmitz, Brigitte (研究代表者) : 基盤研究 (C) 「19 世紀のドイツ語の歴史記述  
と物語記述の比較分析研究」，1,170,000 円

嶋崎啓 (研究代表者) : 基盤研究(C) 「ドイツ語における文法化現象の実証」，  
1,170,000 円

2010 年度

森本浩一 (研究代表者) : 基盤研究(C) 「物語フレームと人物造形の関連に関す  
る比較ジャンル論的研究」，1,950,000 円

嶋崎啓 (研究代表者) : 基盤研究(C) 「ドイツ語における文法化現象の実証」，  
1,170,000 円

2011 年度

森本浩一 (研究代表者) : 基盤研究(C) 「物語フレームと人物造形の関連に関す

る比較ジャンル論的研究」， 1,170,000 円

嶋崎啓（研究代表者）：基盤研究(C)「ゲルマン語における文法範疇の発展パターンと個別性」， 1,170,000 円

嶋崎啓（研究分担者）：基盤研究(C)「ファシズムとの関連におけるA. ボイムラーの思想に見られるドイツ的特質の研究」， 175,000 円

#### 2012 年度

森本浩一（研究代表者）：基盤研究(C)「物語フレームと人物造形の関連に関する比較ジャンル論的研究」， 650,000 円

嶋崎啓（研究代表者）：基盤研究(C)「ゲルマン語における文法範疇の発展パターンと個別性」， 1,040,000 円

嶋崎啓（研究分担者）：基盤研究(C)「ファシズムとの関連におけるA. ボイムラーの思想に見られるドイツ的特質の研究」， 250,000 円

#### 2013 年度

嶋崎啓（研究代表者）：基盤研究(C)「ゲルマン語における文法範疇の発展パターンと個別性」， 1,040,000 円

嶋崎啓（研究分担者）：基盤研究(C)「ファシズムとの関連におけるA. ボイムラーの思想に見られるドイツ的特質の研究」， 260,000 円

## (2) その他

なし

## V 教員による社会貢献（2009～2013 年度）

森本浩一：第 10 期有備館講座・第 3 回「「虚構」としての人間」，講師，大崎市スコアレハウス，2010 年 7 月 17 日。

森本浩一：平成 23 年度みやぎ県民大学・第 1 回「説得と欺瞞のはざま——<レトリック>から人間を考える」，講師，東北大学文学部，2011 年 9 月 12 日。

嶋崎啓：第 2 期斎理蔵の講座「私の見たドイツ」，講師，丸森町民センター，2009 年 7 月 4 日。

森本浩一：平成 25 年度宮城県高等学校国語教育研究会春季総会・講演「コミュニケーションと文学的経験」，講師，東京エレクトロンホール宮城，2013 年 5 月 10 日。

## VI 教員による学会役員等の引き受け状況（2009～2013 年度）

森本浩一

東北ドイツ文学会委員、『東北ドイツ文学研究』編集委員（2009～2013 年度）

日本独文学会東北支部長（2009～2013 年度）

東北ドイツ文学会会長（2009～2013 年度）

Schmitz, Brigitte

東北ドイツ文学会『東北ドイツ文学研究』ドイツ語校訂者（2009～2013 年度）

嶋崎啓

東北ドイツ文学会委員、『東北ドイツ文学研究』編集委員（2009～2013 年度）

日本独文学会語学ゼミナール実行委員（2009 年度）

日本独文学会編集委員（2009～2012 年度）

日本独文学会西日本支部編集委員（2012～2013 年度）

ドイツ語学文学振興会ドイツ語技能検定試験会場責任者（2009～2013 年度）

竹内拓史

東北ドイツ文学会事務局（2009 年度）

日本ゲオルク・ビューヒナー協会事務局長（2009 年度）

川村和宏

東北ドイツ文学会事務局（2010～2011 年度）

## **VII 教員の教育活動**

### **（1）学内授業担当（2013 年度）**

#### **1 大学院授業担当**

森本浩一

ドイツ文学研究演習 I, II

シュミッツ, ブリギッテ

ドイツ文学研究演習 III, IV

嶋崎啓

ドイツ文化学特論 I, II

ドイツ文化学研究演習 I, II

#### **2 学部授業担当**

森本浩一

人文社会科学総論

ドイツ文学概論 I, II



ドイツ文学演習 I, II

ドイツ語学各論

シュミッツ, ブリギッテ

ドイツ語学基礎講読 I, II

ドイツ文学演習 III

ドイツ語学演習 III, IV

ドイツ語科教育法 IV

嶋崎啓

ドイツ語学概論 I, II

ドイツ語学演習 I, II

ドイツ文学演習 IV

### 3 共通科目・全学科目授業担当

森本浩一

基礎ドイツ語 I, II

嶋崎啓

専門ドイツ語

シュミッツ, ブリギッテ

基礎ドイツ語 I, II

展開ドイツ語 I, II

### (2) 他大学への出講 (2009~2013 年度)

森本浩一

青山学院大学 (2009 年度)

放送大学福島学習センター (2009 年度)

放送大学宮城学習センター (2012 年度)

宮城教育大学 (2013 年度)

嶋崎啓

山形大学 (2011~2013 年度)

九州大学 (2011 年度)